

文献

- 1) 結城伸泰: *Campylobacter jejuni* 感染と Guillain-Barré 症候群, Fisher 症候群—交叉抗原説の証明. 内科 75: 389-393, 1995

- 2) 結城伸泰, 瀧 孝雄, 湯浅龍彦, 宮武 正, 佐藤 猛: 免疫吸着カラムは抗ガングリオシド抗体を除去できるか? 臨床神経 35: 440, 1995

書評

戸田剛太郎・大原 毅 編

NIM 消化器病学 第4版

磨伊 正義(金沢大学がん研究所外科部門)

この度, NIM Lecture series の一つとして戸田剛太郎, 大原 毅両教授の編集による「NIM 消化器病学 (第4版)」が医学書院から出版された。

最近の医学の進歩は著しいものがあり, なかでも分子生物学, 特に遺伝子工学, サイトカイン, 癌抑制遺伝子をはじめとする様々な生理活性物質の発見とその同定は各種疾患の病態に迫るものであり, 教科書の少なからぬ部分を書き換えられようとしている。消化器病の分野も例外ではない。

一般に教科書というのは基本的な知識の整理を中心に, あくまで確立された疾病論を中心に記述すべきであり, 新知見や研究の紹介はすべきでないといわれている。しかし, 進歩のめざましい基礎医学の臨床分野への導入は, 各疾患の病態を知るうえで不可欠の要因となっている。消化器病学の分野においても根本的な変革と大改訂を迫られることになった所以と編者も述べているごとくである。

編者の戸田・大原両教授は序文のなかで本書の位置付けを次のように述べている。①従来の教科書の記述を避け, 各疾患の病態生理を理解したうえでの診断・治療への展開, ②これまで基礎医学と臨床医学とが不連続な形でとらえられがち傾向にあったが, 各疾患の病態生理の理解を深めるために基礎医学研究の成果も踏まえ記述しよう心がけた, としている。実際, 本書では, 各分野の最新の知見は Advanced Lecture として紹介されている。③最近, 消化器疾患の治療の分野では内科・外科の守備範囲が不明瞭になりつつあるが, 診療科の壁を越えた編集方式を採用されたことである。実際, 本書を拝読すると, 最先端の研究成果とその解説が随所にみられ, 理解を深めるうえで極めて有意義であり, 本書

に対する編者, 執筆者の思い入れが伝わってくるようである。

本書の構成をみると, 消化器領域全般にわたって Lecture 方式を採用し, 全部で 38 項目の章に分かれている。各々の Lecture のタイトルも従来の教科書的な記述ではなく, 学生への臨床講義やセミナー方式を採用しており, 読んでいても楽しい。その Lecture のいくつかを紹介すると, 腹痛の発生機構と疾患(急性腹症), 消化管免疫, ポリープと結腸癌, ビリルビン代謝と黄疸の分類・成立, ウイルス肝炎とそのマーカー, アルコール代謝と肝, 薬物と肝(薬物性肝障害), 胆汁排泄機構とその異常, 脾の腫瘍および形成異常など魅力的な NIM Lecture が続く。もちろん, 消化器内科医, 外科医に必要な各疾患のエッセンスの記載がなされており, 教科書の性格と最新の知見とがうまく調和している。前述した Advanced Lecture は各項目ごとに挿入されており, その数も 100 以上にわたり, 1~2 頁を割いて紹介されている。

このように本書は従来の教科書にはないユニークな書として完成しており, 編者らが意図した「考える臨床医学」を結実した素晴らしい書である。学生や研修医向けの教科書として十分な内容を備えているだけでなく, 実際本書を拝読すると各消化器疾患に最先端の知識が網羅されており, 消化器病専門医にとっても有益な書になっている。このように他に類をみないユニークな NIM Lecture「消化器病学」を企画, 執筆された諸先生方には賛辞を送りたい。ぜひ, 学生, 研修医のみならず, 消化器専門医の諸先生方にも本書を一読されることをお勧めしたい。(B5判 722頁 9,064円(税込) 1995年 医学書院刊)